

Title	Cleopatra's needles and other Egyptian obelisks, by Sir E. A. W. Budge, Lonbon, 1926, 8vo., XXii+308 pp.
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.3 (1928. 11) ,p.148(460)- 149(461)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

來世界に向つて發展せしむべしとは、著者山川師の高遠なる理想であり信念である。この遠大なる理想の下に出されたる本書が國民精神作興の上に甚大なる裨益あるべきは謂ふに及ばず、本書はまたこれを宗教的立場を離れて純然たる史學の光に照らして觀るも、多大の價値の存するを發見するものである。

即ち本書は漫然たる聖人の生涯に關する記述に非ず、その生涯に幾多の時代を劃し、各時代の事蹟、人格、教義の三方面から之を論述し、然かもその教義と人格の發展が、生涯に於ける外的事件の進展と密接に關係せることを明かにしたものであつて、その論述の條理整然として、批判考證の妥當なる、幾多先人未到の史實を探索して聖人の傳に新光明を與へたるは洵に我等史學に關はれる末流の範とすべきところである。

茲に本書の骨子を一言すれば、「日本第一の智者となし給へ」の發願の下に、清澄寺に入りし若年の聖人は(第二講)、京畿に遊びて後、開覺立宗して法華教中心の教義を唱へ、諸宗を排し、豫言「立正安國論」に罪を得る頃には、既に「法華經の持者」なりとの「覺に達し(第三——四講)、更に伊豆流罪の後には持者を出て、「不惜身命の法華經の行者」或は「末法の法華經の行者」の自稱に進み、小松原法難の後には「日本第一の法華經の行者」と名乗り、やがて蒙古の來牒して安國論の適中と共に「日本の柱」を以て自任するに至り、上行菩薩としての自覺に入り(第五——六講)、更に文永の役によつて豫言の完全に實現せる後は「一閻浮提第一の聖人」と唱へて(第七講)、最高最上の自覺を得たる経路を述べ、身延入の晩年に及んでゐるが(第八——九講)、その教義、人格の發展の

諸階段を明らかにせるところ、多く世に流布する聖人傳に見る能はざる特色であらう。

また著者は佛教史上、國史上、及至は世界文化史上に於ける日蓮聖人の位置を論じ、或はその出現の時期の偶然にあらざるを力説し(第一講)、傳中の奇蹟を強調することなく、また之を解剖するの愚を避け、高級なる教理を平易に述べて、然かも熱誠溢るゝ文章の威力を輝やかしつゝ、よく俗耳に入り易からしめたる、眞に名著と稱すべく、日蓮研究の權威田中智學先生が巻頭に序して頌讚せられしも當然である。只若輩の素讀妄言を費したるを畏れつゝ著者に敬意を表するものである。(有賀春雄)

**Cleopatra's Needles and other Egyptian
Obelisks, by Sir E. A. W. Budge.
London, 1926. 8vo. XXii+308 pp.**

古代の西亞・エジプトに關するパツアの著述は既に頗る多數であるが、更に近く一九二五年に「アツシリヤ學の勃興と進歩」及び「エジプト」の二著作を出した外「バビロニヤの生活と歴史」をその翌年には「ナイル河の住民」と共に表題の著述を出した。彼の活動や偉なりといふべきである。

本書は前記後段の二書と共に、宗教出版協會(Religious Tract Society)から刊行せられた聖書地方の考古學及び歴史に關する叢書改訂版中の一冊をなすもので、もと一八八四年に刊行したる故シエームズ・キング師の小著「クレオパトラの針」に代へんことを

目的とするものである。本協會は夙に一八四八年エジプト及びアツシリヤに於て行はれた發掘に注目し、それが聖書の研究及びその正しき理會に極めて大切なることを認め、所謂古代東邦に關してそれ等の事業と研究とを簡明に記述し、至廉なる月刊六片本として一般公衆に提供し、大に學界と斯學の知識普及に寄與したのであつたが、その後エジプトのオベリスクがロンドンに移されたると一八八三年に於ける英軍のエジプト占領とはエジプト及び近東方面に關する同國公衆の興味を再燃せしめたので、本協會は是等に關しての新著編輯の好時機であるとして、上記叢書の初刊以來經過したる三十年間に於ける斯學の進歩に副ふべく、一八八四年に刊行したる *By-Paths of Bible Knowledge* と稱する叢書は多大の歡迎を受け、爾來數版を重ねたのであるが、世界大戰中にその製版等が軍用に徵發せられたので、爰に新叢書を刊行するの必要に迫られ、斯くして本書は全部書換へられて新著として世に出づるに至つたものである。

本書の内容を見るに、第一章に於てエジプトのオベリスクに關する一切の事項を網羅し、第二章に於てクレオパトラの針がロンドンに移植せられた經過（その大要は三田評論本年七月號の拙稿にあり）を記し、第三章に於てはエジプトのオベリスクの解説を試み、埃及聖字を以て記されたるその碑文の原文と對譯とを掲げ、世界各地に散布せる重要オベリスクの現存地及び容積重量等をも表示し（二七二—四頁）且つアビシニヤの「オベリスク」についても記述し、卷末には參考書目を掲げてある。

斯くして本書は上古の石造記念物の一としてピラミットと共に

エジプト特有なるオベリスクの研究をなすのに頗る完備したる其入門書である。著者バツヤ氏は多年發掘及び大英博物館に於ける斯界の權威であつてフリンダーズ・ペトリ教授の哲學的思索に秀でたるに對して、彼は考證の點に於て優つてゐる。たゞしオベリスクをクレオパトラの針と呼ぶに至つた理由を説明して第十二世紀末にアラビヤ人なる醫師アブダル・ラチフが之を *Masalla* といふ。即ち「埃及王の大針」といひ、又地理學者のヤクトも土人が一般に是等と同じ意味で *Masalla Firida* といつたと記し、アラビヤ語のミザラーといふのは「大針」を意味するのだが、それに附してある附號は卑俗の用法なのである。故に下俗の間では針が男である玉の持物とするのは可笑しいといふので女王のものとされ、それに之がクレオパトラの名と不可分の關係を持つに至つたアレクサンドリヤ市に建てられてゐた處から、（且つは陽物崇拜の下品な意味も加はつて）、女王のものとなされるに至つたのであらうとて、歴史的にはクレオパトラとは何等の關係もないことを記し（十八頁）乍ら後の部分に於てアブダル・ラチフがこれらな「クレオパトラの大針」と記したと矛盾せる記載をなして（百六十六頁）ゐるのは、正確を以て聞ゆるバツヤ氏の記事としては、聊か變である。（岡崎万里）

Babylonian Life and History, by Sir E. A.

W. Budge, London, Second Edition,

1925. 8Vo. XXII 296 pp.